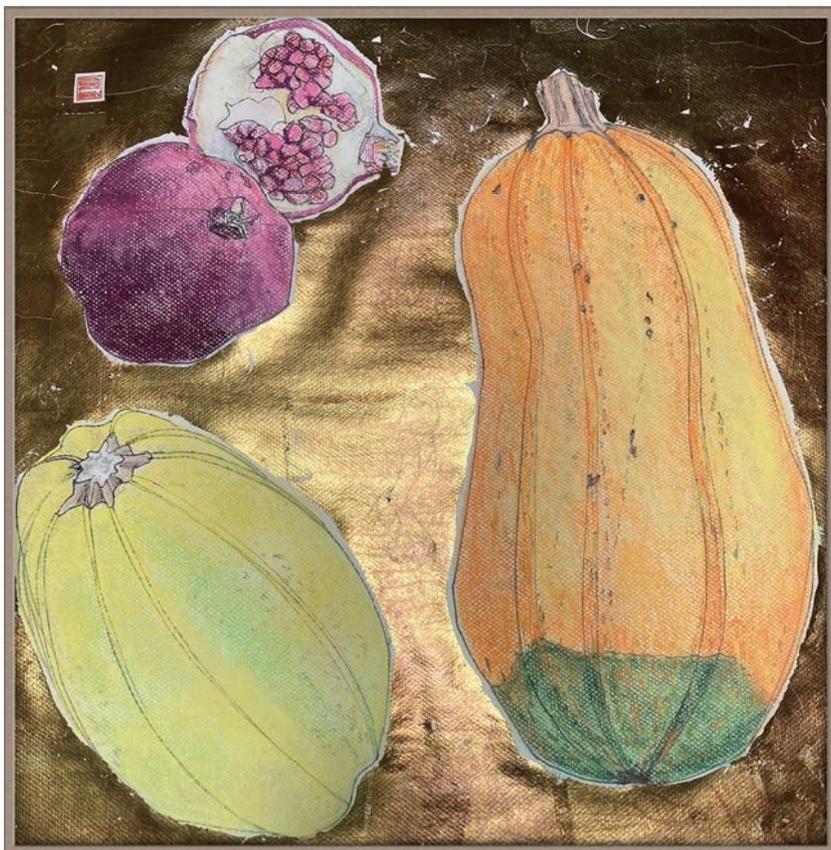


三河アララギ

2021年 令和3年11月 霜月

十一月号

第六十八卷 第十一号



ニューヨーク日記(181) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

CALIFORNIA DESERT

Blue Shoe Diaries



同じ空でも見上げる場所によって全然違うよね。これはカリフォルニアの砂漠、ヤッカバレーの夕焼けです。綺麗だよ。砂漠は私が住むような環境ではないけど大勢の人たちが惹かれるのは分かる気がする。よく写真や動画撮影の背景に使われる魅力ってあるよね。私たちも異次元的なミュージックビデオの撮影で来ました。面白いのが撮れるかな？

It's the same sky everywhere yet it looks very different depending on where you look up from. Here's how the sky looks from Yucca Valley in the Californian desert. I don't think the desert is my natural habitat but the view of it is captivating and mysterious. I can see why it's often the backdrop to photo and video shoots. In fact, we're here to do that. We're shooting a music video here.

アカンサスの徑

御津磯夫

病より萎えてかへれば建蘭の終りの花に逢ひぬ今年は

その種子を収めず培はずいく年か絶ゆることなく咲く曼荼羅華まんだらげ

はばまれて立ちかへり来る庭のみち木通あけびのつるの垂れたるところ

紫草むらさきはまぼろしならず三河なる弓張の山つづくいづこか

憶良より千三百年にわが生きてけふよむ延寿経または寿延経

病みあとの歩みはじめに河骨こうほねの白き花立つ水をめぐりぬ

曼珠沙華まんじゅさわわれに四種類ほどありはやくはむらさき咲きそろひたつ

昼寝とは涅槃ねはんのごとしといへるあり昼寝するわれのいのち延ぶべく

千年の高貴の伝へたもちつつ過ぎしになづまずまごころ歌ふ

むらさきの花はらはらに梗くき立ちて今年は無づる細葉の擬宝珠

三河アララギ歌集Ⅲ

大須賀寿恵

単純化せよと言はれて立ち出づる孟宗藪の十七夜の月

歩みつつ硬くなりくるわが脚に芝生の露の撥ね返り来る

両の手を挙げゐる幼に祖母われは抱きとめやらむ手力はなし

幾度も咲きていくたびも実を結び季なきごとしたねつけ花は

日々通ふ道の竹藪竹の葉の夏の落葉の音の聞こゆる

萎えに馴れ痛みにも馴れてゐるわれに今朝何故に悲しみの来る

若き葉のいまだほぐれぬ今年竹去年の竹を越えてなびける

心窩に汗つたひつつ真昼間をさげゆく鱗が幾度も動く

なだらかに丸みおびたる雨畑の硯抱へて時雨の中帰る

しばらくを波すれすれにめぐりぬし鴨らは水に平に降りぬ

歌集 「續々草々」

今 泉 米 子

自生してま白かがよふ夜顔を夕べ夕べに立ちゆきて見る

はつはつに夏過したりと思ふとき粒撰りの栗と青きカボスと

葉裏白くなびき反へりて竹群を高く越えたりわが犬槐

朝聞きて夕べに忘れまた聞きぬ黄の彼岸花はリコリス・オーレア

白玉の宝とわれの掌の受くる雨雫する皐蘆のひと花

閉ざし来て終りの窓を木犀の香りの窓をゆっくり閉ざしぬ

葉隠りにほつほつ白き蒼あり咲きゆく皐蘆の花のしづけし

柿の實を小鳥ら来り啄むとガラス戸の内より見上げつつある

七十にて醫を隠退し庭畑に大根の萌えをたのしみましき

自らの培りの葱を洗ひあげ青きをわれの手に渡されき

かぜくさ

山本佐登

夕昏れし校内見廻るわが前に梧桐の葉をおとす鳥あり

浅蜷むくことも覚えて大崎の五年六ヶ月はたのしかりにき

中華航空に勤むる夫に随ひて心決め双発二十四人乗旅客機に乗りき

中華航空に勤むる夫と閩北ぎほくにて幼子まもりしは一年五ヶ月

上海にて中国婦人より教はりて蒸餃子作りしは三十年前

言葉通はぬ現地の人と住み夫を頼りてひたすらなりき

子や吾を養ひながら上海にて航空機関士の資格を夫はとりしに

苦学してやうやくなりし機関士にて空翔ぶ日のなく夫は逝きたり

上海の閩北に夫と暮したる日の想ひ出にささへられきぬ

幼二人と夫の遺骨を抱きしめて戦の海を渡りかへりき

私のプロセス

蒲郡 岡本八千代

一日ひとひ一日老いゆく私のプロセスよそれも良きことと今宵は思ふ

ものごとはあまり深くは考えずそうしようよわれ八千代さん

金繰ぐりは何とかなるさと星をみつめ今夜は浮かぶ「色しき即是空そくぜくう」

朝食を昼にすませてそれから書きものをするいつもの私わたくし

コロナ禍に二回めのワクチンを注射せりそのことだけの今日の私

何となく安心をして話しをり二回目のワクチンうちてきてより

ま白きのダチュラの花の目に見えつつ友との話すわが長電話

わがダチュラま白き花花数えきれず今日もダチュラと私のくらし

ま夜中もたった独りのわれにして起きて本読む楽しからずや

この頃は「雨ニモ負ケテ風ニモ負ケ」光りにも負けつつ活らすわれの老いぼれ

ま白きのわれのダチュラの花繚乱りょうらん見せつつ話す人も無きかな

そんなにもレモン一つを待つてゐたの詩を思ひつつレモンを描きぬ

探しもの探してゐたらばわが古き「ぎんどうノート」といふが出できぬ

ぎんどうといふはウラジロハコ柳風吹けば葉裏の光り鳴るらしき

わがノートぎんどうノートの半分はこれからも使ふ何を書くかなあ

誉めやらむ

豊川 弓谷 久子

伸び立ちてマラカスの花咲き盛る秋の気配の無きまま九月

長生きも楽しきものよ我が誕生日祝いてくれる子と孫のいて

我だけが生き残りたり九月生れの姉と妹との三人姉妹

今日のケーキはすべてみさとの手作りケーキ美味しかったと誉めやらむ

秋彼岸の入りの日甥の訃報が届く君は享年七十七歳

「姉ちゃん」と我を呼びたりき幼なき日腕白小僧の面影浮かぶ

弁理士となりて一代利発さも姉の自慢の君なりき

庭に鳴く虫の声聞きつつこの家にて生れ育ちし君を思ふ夜

みさとより郵便小包み届きたり今日敬老の日よ心弾みぬ

彼岸花今年も見たし杖つきて一人来て見る奥山の道

歩む人の無き細道の彼岸花咲き初めゐたり暫し佇ずむ

みのり田の畦に咲きゐる彼岸花遠くなりたる故郷を憶ふ

明日は雨の予報聞きたり一日早く中秋の名月子と仰ぎ見る

少しだけ赤味を帯びて中空にまるき月浮かぶ今年満月

駐車場に一面生えて穂の出でしえのころ草をすべて引きたり

ファーストスター

東京 今泉 由利

軽井沢の木々草々に埋^{うず}もれておのずからなるフィトンチット

こんなにもしっとりとして安らかにフィトンチットに癒やされぬたる

出来たての空気の中にて蘇るあのことこのことこれからのこと

自らの把握範囲をこころして静かに静かに生きてをりたい

気がねなくぶ厚き本にのめり込むどこにも行かない日の続きつつ

たちまちに真黒き雲の広ごれり降る降らざるはどちらでも良し

二週間放置せざるを得なかったブーゲンビリアの落花落葉

石も木も崩れて過去となりゆくを過去の上をもう少し歩く

見えもせず感ずることもあやふやな私をとりまく原子よ如何に

木星が消滅すると伝えられ私より先に消えてはいけない

数億年前のこととてファーストスター星が生まるる輝き初むる

元々は何もなかったといふ宇宙そんな説はなかったことにす

シルクロードの微笑ほほえみ菩薩ぼさつの微笑ほほえみを真似してゐたり今日も一日

東山三十六峰のひとところ今日の私の窓の風景

太陽も月も星も見えぬまま赤きネオンの大阪にゐる

今の世

豊川 安藤 和代

夫婦別姓叫ばれている今の世を理解しがたく眠れずにおり

陸上の部活指導にまっ黒くろ日焼けて孫の夏は終りぬ

四葉のクローバー絵手紙にして幸せを友と分かちて秋を迎えん

青田風さやかに吹きいる広き野に白サギ群れいて動ずことなし

吾れを追い泣いていた息子に付き添われ通院三日目カンナ眩しき

体調の良き日続けば久々に鏡に向い紅などひかん

感染者数の増えきて気の重く佇む窓にポチが尾を振る

夫逝きて三年の秋よ殊更に淋しきはなぜ揺るコスモス

大学の三年生なる外孫の男児なれどもピアスが光る

広き田は色づき初めて千切れ雲ゆるり流れて秋深みゆく

続けて下さい

春日井 清澤 範子

今年は異常な事柄多かりし蟬は雨の中にも鳴けり

介護保険にて貸出しベットは具合よく体に合いて心よき目覚め

娘が吾に買ひてくれたるシルバーカー玄関に置きて梅雨明けを待つ

白山町は堤防あれど被害なく橋流される被害なかりき

蟬の合唱にて目覚めし今日も猛暑日となりて室にて水分補給

老いては子に従えと三河アララギへの投稿は続けて下さいと娘の一言

二人の暮し除々に慣れ来ぬ夫亡き後の分担作業

介護3なり大方のことは娘の意見に従ひ暮るる

シルバーカー引いてリハビリ励むなり心頑張る思ひを持ちて

病院の待ち合ひとみに混み合いひて三河アララギ読みつつ待ちぬ

頭こうべをたれて白花つけし稲穂の上蜻蛉はくるりと宙返りする

秋に空き

大阪 伊藤忠男

青空に浮かぶ白雲ゆつくりとどこに行くのか東に進む

庭の柿熟れたころとて見上げぐれば中身はすでに空となるなり

何ひとつ失うものの無き強さ行く手無限に広がっている

何事に臨むはいつも「空」にして見るも聞くのも我にしみこむ

朝起きてまずは確かめ晴れ予報今日は手荷物軽く済みそう

下り立ちたサギの親子の羽根作り寄り添う母の深き愛見る

濡れ縁に座り紅茶に団子添え月の出待つも雲邪魔をする

夜半過ぎ雲の切れ目に月明りほんの半時幸せな時

ススキ越し年に一度の月明り夜空を見上げ露を目に受く

稲穂垂れ刈り取り間近胸躍る今宵米蔵掃きて主待つ

急に伸び

東京 矢崎直人

秋の星生者と死者の語り合ふ祭りなくとも綺麗に並ぶ

秋の声一際高く教ふるは一番星の三日月に添ひ

十五夜を生きとし生けるもの愛づる命奏でる秋の声やも

名月や雲間に顔を覗かせて光を分けてくれ給ひぬ

台風の去りつつ風の弱まれば微かに秋の虫たちの声

朝夕の涼しくなれり昼間には日の照る間残る暑さも

正装の親子の井草八幡宮詣でる森のつくつく法師

秋の蜂ダンスを共に秋の蝶交互に舞えり踏切の音

急に伸び急に咲くなりヒガンバナ一つ開けば次々開く

目を閉じて耳を澄ませて漕ぎ出づる広くて深い心の海に

タマスダレ

東京 森岡陽子

日傘にと蛇の日傘置く庭園の池を三羽の鴨岸向ふ

のれん閉づ蕎麦屋の親父スツキリと残りの人生ゴルフ三昧

廃屋の軒下吊す風鈴はいとも淋しげ切なげの音

コロナ禍と暑さの中の過す日々句読点なし時もなし

深大寺犬達の眠る地は幟並べて早くも新蕎麦

職人の無駄なき動きリズムありジルバの様なワルツの様な

空高し江戸の入口足跡の一步あるよう墨田川神社

人去りし静かな夕暮秋の声マンションの谷間小さき空き地

庭園の花の名前の札を目に初めて知るは白いタマスダレ

秋の虫

豊川 白井信昭

家近く田圃も畑も埋められて中島の景色大きく変わる

朝掃除裏の網戸よりひんやりと外気入りくる秋の気配して

中島の側溝排水路数多^{あまた}落つコンクリートの瓦^{がれき}礫拾いたり

西方の道歩き来て一本の高野槇庭に青くそびえ立つ

雲ゆきの怪しきままに孫と来て御馬港今し雨おち始む

夜毎の床に聞こゆる松虫の頻り鳴く声チン・チロリン

幾度か土留崩れてやり直すコンクリートの柱と平板

交わりの縦横^{たてよこ}道端彼岸花赤く燃ゆるごと農道をゆく

中秋の雨降る今宵松虫鳴く昔の秋を思いやりつつ

頻り鳴く虫の音^ね聞こゆる夜の雨十五夜の月ついで見られず

母よ母よ

蒲郡 杉浦恵美子

湯気ひとすじ薬罐の口に秋を知る厨の窓の斜めの日差し
知ってゐる筈のこの路迷ひたり十年前は跡を留めず

漸くに母の日記を繙きぬ哀しさよりも懐かしさゆゑ

我を真似てそつと作りし歌十首母の最後の日記の片隅

くせのある靴音のしてわが娘くると詠まれし我ぞああ母よ母よ

母逝きて四半世紀の今にして日記に残れる歌十首を知る

病得て初めて母はたったひとり個室の夜を如何に明かしき

安城に我は何回通つたらう今は単なる一通過駅

入院の母の日記は繰り返しお詫びと感謝の文字が連なる

母らしく何方が見ても障りなき日記残しぬ誰のためにか

気が付けば半日母の日記見て秋の長雨もの思ひ居り

御神酒当番

豊川 山口千恵子

思ひつきし一つ言葉を書きとめむ枕元なる鉛筆探る

雨の降る日々続きつつダチュラ咲く花々白々塀より高く

青き葉と真白き花のとり合はせダチュラは咲けり香りほのかに

一年に一度廻りくる当番秋葉様の御神酒当番

秋葉様のお堂の床に散らばれる賽銭集める当番われは

道普請知らせる回覧回りくるカレンダーに印す赤鉛筆に

家ごもり何処へも行かぬ日々なるに早々コロナワクチンをうつ

天井の隅にクモの巣はりあるを見つけてそのまま幾日を経る

村外れの無住の寺の裏庭に彼岸花咲きぬ一面咲きぬ

彼岸花畦に赤々咲き並ぶこの田は他人ひとに貸したるわが田

彼岸花

豊川 夏目勝弘

違はずに秋彼岸に花の咲不思議でもなしそれでも不思議

いと狭き庭一面に赤黄色彼岸花の乱れ咲き立つ

雑草の草丈に合せ花茎の高低のあり赤黄乱立

花終へれば細き葉繁らせ冬草を防ぎてくれるを頼みとしてゐる

彼岸花咲きゐる間は我が家の供華はすべて彼岸花なり

父母もあの世に還りて四十余年彼岸に帰りて来ることになし

父母と夢にて相ふこともなくなりぬコロナなきあの世はよろし

朝あさに仏壇にて手を合はすただそれのみの先祖供養

線香もローソクなども百均にて買ひてくるなり心のありや

仏飯の一週間分が今日の我が昼飯となるチャーハン仕立

朝あさに頭上の北極星を見上げるが常となりをり曇り日つづく

信ずるがゆゑに見えくるもの多し見えないモノに真実があり

中国の鉄のカーテンに阻まれて台風十四号日本を襲ふ

台風雨の日つづきテレビの前にしばしの眠りを楽しみてをり

台風の来ればたちまち電車が止まるさとうの御飯に卵かけの日々

『いじよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

コロナ禍に人をさけての子供等は夕暮れの浜に集まりてをり
わが孫等初めて釣りしハゼ八匹跳ねるを揚げて至福の笑顔

牧原規惠

若人らの汗と涙を見つめつつ飲むよレモンジュースの甘酸つばさを
束の間の祭典終はり日常の老三人の茶碗を洗ふ

稲吉友江

講堂にて二Fの皆とTVに見ぬかの日五輪よ今日に懐かし
長々の雨降り続く今年の盆供へし百合の白花香り来

鈴木美耶子

目前に山鉾ありて息を呑む偶然の出会いひ四条烏丸の
わが庭の石畳辺の一角に子規の好みし花よ秋海棠

吉見幸子

可愛いと勝手に見ないで下さいと孫は持ち来る「家族ケイタイ」
夏休み二度目の連泊孫の言ふ「お母さんのご飯私食べたいな」

牧原正枝

孫と二人「生命の海」の科学館「ばあばあば」と呼ぶ声響く

森 厚子

科学館にて「生命の海」の映画見ゆ「シーモンスターだね」と孫に教はる

干天の慈雨降る今日はあの草とこの木の芽とをはやる心に

山崎 俊子

夕まぐれ薄桃色の花かげにわれはたたずむそのムクゲの花

義母^{はは}と娘^{むすめ}我の三人初めてのホテルラウンジのアフタヌーンテイ

伊藤 晴江

青白き電灯^{でんとう}の下に青白き蝶の舞ひ来て我ただ見て居り

茶筌ふるたつたひとりの昼さがり薯蕷饅頭は御下りにして

三田美奈子

日にひとつ出来ることだけやればよしカーテン洗ひけふは花丸

久し振りに会へしかのごと父の文字見入るこの盆雨降りしきる

水野 絹子

父の文仏壇の奥に「かあさんのためにもう少し頑張るよ」とが

現代学生百人一首

東洋大学

席替えて君の隣の席になる「えー」と言っても上がる口角

大阪市立西高等学校三年（大阪府）

安田朱那

酷暑の日過ぎればそこに訪れる心高ぶる岸和田の秋

大阪府立岸和田高等学校一年（大阪府）

七山谷優介

病室の母と毎日ラインする既読の早さ元氣伝わる

大阪府立岸和田高等学校一年（大阪府）

光山紗矢

画面越し既読はつけないままでいる一人で悩む君への返事

近畿大学附属高等学校一年（大阪府）

宗川弥生

少ししか会えない父とあそぶけど楽しすぎたら別れがづらい

大東市立往道中学校二年（大阪府）

筒井実里

静電気パチリと鳴ったそれだけで笑えた君とあの冬するとき

関西学院中学部二年（兵庫県）

岩田真結

ふりそそぐ太陽の陽と急な雨ぱっくり割れた我が家のトマト

兵庫県立大学附属高等学校三年（兵庫県）

中村温花

贈呈誌

森岡陽子

冬雷 2021年 10月号

○蔓ばらのハートの形に束ねられ窪みに白き花ひとつ咲く

森藤ふみ

○同じ巢に生まれ出でたる子雀か来るとき去るとき五羽連れ立ちて

天野克彦

○近ぢかとクマゼミの声聴きながらテレビに観ている氷河の崩れ

江波戸愛子

○しなやかに扇持つ手を揺らめかし車椅子の友笑顔に踊る

黒田江美子

○南天の実を狙ひくる鶴の鋭きこゑ明けのひととき聞こゆ

水谷慶一朗

○ひらひらと黄蝶低く来タンポポの花ひと廻り離れてゆけり

赤羽佳年

○金メダル世界一の重さゆゑ苦しみにぬいた笑顔は眩い

村上美江

○晴れ渡る穂波の上を群れ雀車の音に一斉飛び立つ

吉田 睦子

○むね越えて行ける一羽を追ふ一羽鷺の羽音のする朝ぼらけ

姉川美枝子

○香草の鉢のあたりに鳴く虫の香にむせたるかりズムの狂ふ

山本 貞子

○ちりぢりに鳴き継ぐ蟬の声のせて風はしづかに夜を吹きくる

野村昭一郎

○歩み行く砂丘の向うの海見えず中洲の雑草に葦の穂白し

板倉 巴

○幾つもの雪溪越ゆる縦走にスプーンカットの雪溪ひとつ

益坂 順子

○小さな実を結びたる毬栗の落ちて散らばる木漏れ日の道

川上美智子

○港には出船見送るあまたのひと八戸沖へさんま船向かふ

松崎みき子

めざせ青春 われらこそりて

高橋育郎

一、あかるい空よ 輝くひかり

青春をめざす われらここに集う

肩寄せて 理想を語り

手を組んで 励まし合おう

開けゆく習志野に 希望は躍る

新しき生命いのち いまよみがえる

二、紺青の海よ 沖ゆく船よ

青春をめざす われらに年令としはない

生きてゆく 喜び語り

夕星に 足をとどめる

夢のある習志野に 未来を託す

信頼の輪を 広げてゆこう

三、 緑は茂る 豊かな恵み

青春をめざす われら共に歩もう

薔薇は咲き 心は満ちて

干潟には 水鳥の群れ

美しき習志野に 楽の音響き

幸福の女神 永遠にほほえむ

『俳句』

その上に富士を乗せたる芒原

山元正規

酒米の田と知つて来る稻雀

流星や漁火一つ二つ三つ

彼岸寺の塔婆を鳴らす秋の風

重野善恵

憂きことも命なりけり秋夕べ

青年の梨食む白菌輝けり

釈迦堂の淡い明かりや銀木犀

森岡陽子

水琴窟や風のやさしき彼岸花

水澄みて浅き川底石の照る

虫集く谷戸に広がる円覚寺

浜田紀政

無月なる川を行き交う手漕舟

寄せ植ゑにひと色を足す草の花

レモン水日記に残す妻の嘘

松本周二

古風なる家に馴染みて月今宵

線香かそれとも萩か寺煙る

鳥啼いて紫の萩盛りなり

木村歩歩

子供らのはしゃぐ声無し芋畠

木犀や人待つ時も苦にならず

花落ちて心変わりか割れ柘榴

高塚に誰ぞ眠らん曼珠沙華

書道展出で夏昼間の百日紅

植村公女

轟音は空の片隅秋日影

空席のまま終点八月尽

初風や津軽の広き大豆畑

今泉如雲

唐黍やその原産はペルーとて

羽前大山の酒かな雁渡

家一軒三日で更地秋の晴

矢崎直人

水澄むや二匹魚増ゆ手水鉢

手の甲に小さきはたはたとびきたり

見ゆるもの皆健やかに秋麗

今泉由利

億年をまえのことか星飛んだ

宇宙とはどこどこまでも秋思

秋水の澄みて流るる西芳寺

栗の実を山盛りにする豊穰

かさね吟行会

「田芝離宮恩賜庭園」 9月

田中清秀

小鳥来る苑に小さき風連れて

正規

秋立ちぬビルの間の芝離宮

善恵

枯滝を吹抜けてゆく秋の風

陽子

久しぶりの吟行会である。現在東京都は新型ウイルス感染対策の緊急事態宣言下で油断できない状況である。しかし、二回のワクチン接種とマスクの着用、手の消毒や三密を回避すれば感染はある程度防げるのではとの樂觀的な観測があり、また、長引く自粛生活のストレスから精神的な解放を求める気持ちが高まっている。そんな中、今回の吟行会は交通の便が良くて来場者の比較的小さい庭園を選び、浜松町駅前の旧芝離宮恩賜公園に出かけることになった。この公園には平成三十一年十二月に一度訪れている。その時の紀行文には園内紹介として名石が用いられた勇壮な石組や回遊式泉水庭園、西湖の蘇堤を模した石堤などが書かれている。

令和三年九月十日、秋浅き芝離宮を散策した。予想の通り、来場者は少なく静かで広々とした庭園は、優雅な泉水や石組が落ち着いた佇まいを見せていた。

改めてこの庭園の説明をすると、小石川後楽園と共に、東京に残る江戸時代初期の大名庭園の一つである。回遊式泉水庭園の特徴をよくあらわし、池を中心とした庭園の区割りや石の配置は見事である。明歴（一六五五年）の頃海面を埋め立てた土地を延宝六年（一六七八年）、時の老中大久保忠朝が四代將軍家綱から拝領し、自分の藩地小田原から庭師を呼び庭園を造ったといわれ、「楽壽園」呼ばれていた。その後、紀州徳川家の芝屋敷となり、さらに明治四年有栖川家の所有に替わり、同八年には宮内省が買い上げている。大正十三年に東京都に下賜され、その後国の名勝に指定された。面積四万二千平方メートル、特に高い築山からの眺めは中国の西湖の蘇堤を模し、中の島と浮島を配し壮麗である。園内のおもな植物はクロマツ、クスノキ、サツキ、サクラ、フジ、ハナシヨウブなど多く植えられている。

先駆けの萩の小徑に佇みぬ
藤棚の聞くともなしに秋風鈴

さち子
素山

立秋は過ぎてても残暑が残る今日この頃、秋めいた風が吹き始め、季節の移り変わりを感覚的に感じられる。紅葉にはまだ早いが庭園には秋の七草のハギの花やススキの穂が生え始め、着実に秋の訪れを告げている。初秋の季語として、処暑、残暑、新涼から秋めく、秋され、秋のまんま、朝顔、桔梗など多くが使われる。そして仲秋、晩秋と多くの季語が用意されている。季語で一番多いのは秋かとおもったが実は夏が多いという。合本俳句歳時記の収められて



いる二五四語のうち夏が七二四、続いて冬五一〇、春五五二と続き、新年が二二五と少ないが秋は五〇三だった。もう少し多いと思っていたが意外な結果だ。

旧芝離宮恩賜公園周辺は、近年急速に整備され、ウオーターズ竹芝と呼ばれる複合施設に向けて浜松町駅からは高架の歩道橋で繋がりが、近代的な高層オフィスビルが立ち並ぶ。そんな中に、緑多い庭園と池面に高層ビルを優雅に写して、大都会の癒しのオアシスとして芝離宮はしっかりと残っていた。

ひとときの寛ぎの時間を過ごし、初秋の庭園をあとにする。恒例の句会は予約していた三田のレストランで昼食を取った後、いつものように嘯目三句出し四句選で行い、久しぶりの吟行は楽しくそして静かにお開きとなった。

『酔いの徒然』（二一五） 丸山 酔宵子

態である。

『サマー・イン・ソウル』

（あるいは、革命がテレビ放映されなかった時）』

コロナ禍以前は、毎月最低10本以上の映画をロードショーで見れていたが、コロナ禍以後では、残念ながら年間40本程度になってしまった。

未だ緊急事態宣言が続いている9月初め、日比谷ブロードウェイは昼時でも閑散としているが、日比谷ミッドタウンの東宝シネマは通常営業である。

昨今の新設映画館は当局の指導により、上映中の換気は自然に何回も行われ、街中や繁華街を歩くより安全とのこと。しかし、体温検査と消毒、客席間隔を保ちながらのマスク着用は厳守である。

そんな厳しいコロナ対策状況の中で、評判高く、前からは是非見たいと、残暑でうだる昼下がり、地下鉄に乗って「サマー・イン・ソウル（あるいは、革命がテレビ放映されなかった時）」を見に来た。会場に入ると、驚くなかれ、それなりに雰囲気のある中高年で全席満員の状

1969年、ウッドストック・フェスティバルと同じ夏。ウッドストックから160キロメートル離れたニューヨーク・ハーレムで約30万人を集めたもう一つの大規模フェスティバルがあったのである。

それは「ハーレム・カルチュラル・フェスティバル」。若きステイヴイー・ワンダー、B・B・キング、ゴスペルの女王マヘリア・ジャクソンとメイヴィス・ステイブルズ、当時人気絶頂のスライ&ザ・ファミリー・ストーン、ニーナ・シモンなど、全米ビルボードチャートを席巻していたブラック・ミュージックのスター達が集結した幻の音楽フェスティバルである。

しかし、その映像は何故か誰の目にも止まることなく、50年もの間地下室に埋もれたままになっていた。この歴史的映像の大発掘を経て、幻のフェスティバルの全貌をパワフルなドキュメンタリー映画として蘇らせたのが、4度のグラミー賞を制したドラママー、DJ、作曲家そして映画監督でもあるアミール・クエストラブ・トンプソンなのである。

初監督作でありながら見事な編集と演出力を披露し、

サンダンス映画祭で高い評価を得た。クエストラブは、至高のライブパフォーマンスの数々と、生きたアメリカ現代史ともいえる貴重な記録映像を織り込み、誇りと希望に満ちあふれた黒人のメッセージを力強く訴えかけている。

伝説のアーティスト達による50年前のパフォーマンスや会場に詰めかける観客たちの姿、カラフルでエネルギッシュなフェスティバル会場全体の様子が生き生きと描かれ、躍動感あふれる彼らの表情からは当時の熱気が伝わってくる。また、当時のファッション、カルチャーを垣間見ることが出来る貴重な映像である。

政治、文化、ファッション、生き方すべてが変わった激動の時代に、音楽が人々の心を動かし、一つにした様子を歴史に刻み、自由や尊厳、生きる喜びが映しだされるその様には、誰もが心を奪われずにはいられないだろう。

1968年のマーティン・ルーサー・キング師の暗殺以降、デトロイトからフィラデルフィア、アトランタに至る多くの都市部では黒人の怒りが爆発し、大規模暴動が頻発していた。そのような緊張した状況の中で、ニューヨーク市当局は、黒人の不満の捌け口としてこの大規模

なフェスティバルの開催を許可したのである。

ミュージシャンのパフォーマンスの間に、当時の参加者や関係者の証言が感動的に挿入されているが、その中で印象的な証言では、「ニューヨーク・タイムス」初の黒人女性記者が、このフェスティバルを取材記事にした際、今までは黒人を表現するためには、「[NIGRO (ニグロ)]」として書いていたものを、「[BLACK (ブラック)]」に変更させたということである。それ以来、ニグロと言う表現からブラックに変わり、黒人のプライドを表現するようになったのである。

『ブラック・ライブズ・マター』が叫ばれ、アフリカン・アメリカンの歴史と文化に注目が集まる今、埋もれた50年とともにその端緒を明らかにしている。

彼の初々しいステイヴィー・ワンダーの、お茶目な映像とともにエンドマークが画面に映り、シアターの照明が点けられても、満員の観客皆がなかなか席を立とうとせず、懐かしさと感動に浸っているようだ。

ハーレムの息吹込み込む秋暑し

酔宵子

楽しい時間 108 山本紀久雄

2021年9月30日

九代目市川團十郎・・・其の十四

嘉永3年（1850）、13歳になった少年団十郎は、ある疑念にとられる。それは土佐派の絵師・花所隣春（福島隣春）から学んでいた絵画を通してであり、芝居の世界そのものへの懐疑心であった。

《演劇を改良して見やうと思立たのは私が13のころでしたが、其念の起つたのは土佐風の画を習つたので、絵巻物を見たり、また自分で画て見たりした所から、切望かう云ふ形に衣装でも何でも拵えて演て見たい、当時の演劇で仕て居るのは皆嘘だと、怒り考へは起したものの、此時代では逆も行はれ無い、私の親父が真実の鎧を着て舞台へ出てさへ、幕府の御咎を蒙つて江戸構へと成たくらひだから、実地に行れやう咎がありません》（参照『明治歌舞伎の成立と展開』漆澤その子著 慶友社）

団十郎が《私の親父が真実の鎧を着て舞台に出てさへ、幕府の御咎を蒙つて江戸構へと成つたくらひ》について解説したい。

「私の親父」とは実父の七代目団十郎である。七代目は「勸進帳」の初演者で、「歌舞伎十八番」の制定者、世に広く知られている名優である。

七代目が江戸から追放された事件の発端は、天保12年（1841）10月7日の火事であった。火事の原因は中村座の失火で全焼。火災は堺町・葺屋町（現在の中央区日本橋人形町3丁目）一帯に延焼し、市村座も類焼し全焼。浄瑠璃の薩摩座と人形劇の結城座も被災した。

江戸の火事は、団十郎と同じように「江戸の花」といわれ、江戸名物になつていたのが当時の実態。

中でも娛樂街の中心であった中村・市村両座の火災はきわだつて多く、明暦3年（1657）の大火で全焼してから、今回の天保12年に至るまでの184年間に32回全焼している。そのうちでも特に激しかったのは元禄16年（1703）から享保6年（1721）に至る18年間に8回、それと文化3年（1806）から天保12年までの35年間に10回発生している。

折しも幕府では、水野忠邦の「天保改革」が推進されていた。改革は逼迫した幕府財政を立て直すことを目的としたものだったが、水野は同時に儉約令によつて町人らの贅沢を禁じ、風俗を取り締まつて庶民の娛樂にまで掣肘を加えた。

堺町・葺屋町一帯が焼けたことは、こうした綱紀肅正をさらに進めるうえでの願つてもいまい好機だった。北町奉行所に中村・市村・森田の三座元が召喚され、強制移転を申し渡されたのである。

というこゝで、浅草聖天町（現在の台東区浅草6丁目）の小出信濃守の下屋敷二万八千坪と、五千五百両の御手当金が与えられ、翌天保13年（1842）に移転させられたのである。

この天保改革の一連で七代目は、江戸十里四方の追放の刑に処せられた。これは、江戸市民に絶大な人気者であった七代目を処罰することで、「罰百戒」効果を狙つたものであった。

天保13年4月、聖天町は江戸における芝居小屋の草分けである猿若勘三郎の名に因んで猿若町と改名し、夏頃までには各芝居小屋の新築が完了、9月には中村座と市村座がこの地で柿落しを行なつてゐる。さらに同年冬には木挽町の河原崎座にも猿若町への移転が命じられ、翌天保14年（1843年）秋にはこれが完了した。芝居茶屋や芝居関係者の住居もこぞつてこの地に移り、ここに二大芝居町が形成された。

移転した浅草聖天町は外堀のはるか外側、堺町・葺屋町からは東北に一里はあるのかという辺鄙な土地だった。水野忠邦はそこに芝居関係者を押し込めることで、城下から悪所を二掃しようとしたのである。

河原崎座の移転が完了した直後、水野忠邦が失脚、天保の改革は頓挫する。その結果は水野の目論見とは裏腹に、猿若町で中村座・市村座・森田座（または河原崎座）の三座が軒を連ねたことで、役者や作者の貸し借りが容易になり、芝居の演目が充実した。また堺町・葺屋町では常に頭を悩まされていた火災類焼による被害も、この町外れでは稀で、被災後の修理や建て直しによる莫大な損失も激減した。加えて、浅草寺参詣を兼ねた芝居見物客が連日この地に足を運ぶようになり、吉原にも近いということもあり、歌舞伎はかつてない盛況をみせるようになって、明治5年（1872）に森田座改め守田座が新富町（中央区）に移転し新富座とするまでの30年間、江戸随一の娯楽の場へと発展した。

さて、九代目が師事した絵師は、古土佐派―復古大和絵派、有職故実の研究を重んじていたわけで、これらの主張や発想は、九代目の伝記や芸談にしばしば見られるのと軌を一にしている。実物の武具を買い込んで、周りから「気が変だ」といわれ、有職故実への関心を「病気」と嘲笑されたという九代目まつわる挿話が、



猿若町史跡表示板

復古大和絵派の画家たちの気質と呼応するのである。つまり、少年団十郎は、舞台面にあらわれる武士に扮した役者の衣装と、絵巻物のなかに描かれている武士の扮装との相違に違和感を覚え、「真実」で舞台を彩りたいという憧憬を抱くようになったというのである。

しかし、幕府は大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡した元和假武以来、歴史上の事件を劇に作り演じる事を治安に問題ありと禁止しており、仮にその時代の舞台や浄瑠璃に歴史上の材料を採用しようとする際は、時代を改め、人名を変えざることを要求した。

ところが、九代目が31歳の時、明治維新が到来し時代は大きく動いた。

《御維新後に成て、編笠を被る事も免されて、今までの境は自然と破れたから、社会との交通が自由になりました。幕府が喧しかった法度も構わ無いやうに成たから、多年考えて居た改良が出来る気運に向つて来た》（参照『桜痴居士と市川団十郎』）

徳川幕府から明治政府への体制移行は、九代目にとって「真実」に彩られた舞台の実現を可能とする「気運に向つて来た」のである。このころは重要である。

幕末維新という転換期を生きた人間特有の「時代精神」を備え、実際に変革を実現した人物は様々な分野で見出すことが出来るが、ここ「梨園」という世界でその役どころを引き受けたのは九代目だけであった。

それは九代目が、幕府体制下であった時から「演劇を改良して見よう」と考えていた、つまり、志を抱いていたがゆえに、政権交代という時勢の変容を、自らの問題として認識することが出来たのである。

いよいよ九代目の時代が来たのか。しかし、物事はそううまくいかない。次月に続く。

絹の話 (132)

「アトリエテレビ」今泉雅勝

糸という字の成り立ち

糸は象形文字

糸という漢字は繭から糸を揚げている様を文字化した象形文字から発展ものです。

象形文字は古代中国の黄から殷の時代の亀の甲や獣骨に刻まれた甲骨文字とともに進化して来しました。

その時代に既に繭から紬糸ではなく、生糸を揚げていた事が判ります。

甲骨文字 象形文字



糸という字になぜ小を使うのか

糸という字は象形文字で解る通り3個の繭から撚りを掛けながら糸を揚げて行くので、象形文字に見る様に点

点が3個で良いと思いますが、下にわざわざ小という字を使う訳は繭が「小さく糸が細い」を強調させたのではないのでしょうか。

繭から湯気と一緒にゆらゆら揚がってくる1本の糸を「忽こつ」と言います。漢字整備ができた頃には忽が5本撚られた物を糸と書きました。

糸の細さだけを示す文字であれば「勿な」という文字の方が良いと思います。勿は象形文字では弓を弾いたとき弦が見えない、吹き流しが揺れて短冊がよく見えないなど、よく見えないを意味しますが、忽は勿の下に心を付けています。心の文字は心臓を表す象形文字から出来た文字で、人の心の内は見えないので、忽は勿よりもさらに見えないくらい細いという意味が込められて、忽という字を当てたと思われれます。糸の小と忽の心とは小さくて細く、見えないという意味で繋がっているのではないのでしょうか。

糸と絲はどう違うのか

「糸」とは5忽を撚り合せたもので、「絲」は糸が2本合糸されたものです。通常の糸には絲を書くほうが正しいようですが、当用漢字から除かれましたので現在は使われなくなりました。

さらに絲が2本合糸されると「毛も」と言い、忽の20倍

の太さになります。この太さが人の頭髮の太さに近いと言われます。

毛が2本合糸された糸は「厘^{りん}」で、日本の円以下の貨幣単位に使われました。

3 忽の糸で織った織物は実在したか

古代中国で象形文字が使われていた頃は恐らく忽3本で織った織物があり、この織物は目に見えないほど薄く、ヒダしか見えない仏陀の法衣（藕^く糸^し蓮の糸？）に似た薄帛^{うすまゐ}が織られており、権力者の王妃や王女は毛や厘または絶（少し太めの紬糸）で織った厚手の錦（色糸入り緋）の上にこれをまとい、自然光の中で、下に着ている厚手の錦を玉虫色に輝かせて見せていました。この姿は「綺麗」と言われました。綺とは上等な絹綾織物、麗は美しく角が出揃った雄鹿を意味し、綺を着た貴婦人の近くをその鹿達が行き過ぎて行く、その風景が綺麗と言われたのです。当時、蟬羽根の様に薄く霧の様にしなやかな布をなびかせて歩く様を「羽振り」と言っていたようです。それを裏付ける話として「宮中の馬が王妃様の美しさに惚れて飼葉^{かいは}も喉を通らなくなった」など多くの話が伝えられています。

今日本当に3忽で織物が出来るか織物作家が挑戦した所、見事出来上がりしました。熟練と精魂を込めればそれ

は可能である事が証明できました。

但し、現在の一般的繭は大型になり、3デニール前後の糸が多く、古代の繭は小型で1・5デニール前後ではなかったかと想像すると、出来上がった布の薄さは現代の物の半分くらいの薄さであったのではないかと思われます。

糸への漢字

絹の世界で漢字は大変便利です。文字を見ただけで綿や糸、布の良し悪しの程度が判ります。

例えば「綿」は糸へんですので絹綿を意味します。植物から採られた綿は「棉」と書かれます。

しかし綿ではその良し悪しの程度がはっきりしないので、高級綿に「緜」という字を充て、屑綿には「絮」が使われます。同じ様に絹だけでは織物の良し悪しが判らないので、美しい綾織には「綺」、薄絹には「紗」、縦緯糸が細くて織密度の高いものを「縑^{けん}」、平織りで太い糸で織られた物は「絶」、絮の甘撚りの織物は「紬^{ちゆう}」と書かれました。

日本でも律令制定期の文書にはこのような文字が使われております。

漢和辞典で糸という字を調べると実に沢山の字が出てきます。それはいずれも絹がもたらした漢字文化です。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言

<https://hondachiro.exblog.jp/>

2021年10月4日

体調不良

秋口は金木犀が香り

朝晩涼しく過ごしやすいですよね

ただ

今年の秋は寒暖差が大きく気圧の変化も大きく

体調を崩しやすくなっています

それに加え

止むを得ないですが身体に化学物質を入れるのがダメ

押しになり

内臓の血流や動きが悪くなり位置がずれ

頭痛

倦怠感

皮膚の問題

便の不調

ギックリ系

睡眠障害

目の不調

アレルギー症状

などなど

中々の辛い症状へとつながっていきます

本田カイロ+US+ゆたぼん

で身体を回復させ

これからウィルスが強くなる 低温 乾燥 の寒い時

期に

万全の状態で備えて行きましよう

今日も笑いながら行きましよう

2021年10月6日

秋という季節

秋晴れの日に空を見上げると

天高く馬肥える秋 まさごピツタリの空です

秋といえば

美味しい旬の物が多くついつい食べてしまいますよね

秋の夜長という言葉があるように

寝る前に本などを熟読してしま

ついつい寝るのが遅くなってしまう

この2つ見身体に悪い行為ですが見方を変えたと

秋の食材で夜食を食へ過ぎてしま

直ぐに寝ると内臓に負担がかかってしま

そこで秋の夜長で本を読んで寝るまでの時間を長めに

と

つ

解釈が出来なくもなっていますよね

都合の良い解釈ですが

この時期はこれから来る冬に向けて準備をする時期です

なるべくなら

腹八分目にして23時までには就寝しましょう

ただ

休日前など1週間に何回かは金木犀を香りながら

秋を楽しむのも良いと思います

心と身体のバランスを大切に

今日も笑いながら行きましょう

「江上浩二の独り言」 47 江上浩二

コアコンピタンス

令和3年6月号で20年前のノートという題で呟かせて頂いたが、これはその2年後、2006年10月初めのころの話である。それを思い出した様に4年後に次のようにマイブログに呟いていた。題目はコアコンピタンス(以降○○)であるが、結論を先出ししてしまうと、「自分の弱みも知れ」ということになる。

土曜日に知り合いの方とお会いした。用件の話は別として、話の流れで、意外と自分の○○が出来ていないんだよね」という話になった。近い将来コンサルタントを目指している方にとって、いや昨年(2005年)からコンサルタントとして独立した、何とか食い扶持を稼いでいる私にとっても耳の痛いことばである。

未来を予測する、未来図を書くということは簡単に口にする事が出来るが、一介の独立したコンサルタントにとつては真剣に考えなければならぬのが、○○確立である。勤めている企業での業務をこなしたり、依頼仕事をこなしたり、商売をしていてそこそこの売上や利益

を計上していても、自分を見失い、これが自分の○○だと言えないのである。

40台半ばにコンサル養成講座を受講し、最後にまとめた自分の発表論文がNCC (Next Core-Competence Chain) ということを、家に帰ってから思い出した。自分では新しい言葉を作ったつもりであったが内容は今ひとつ満足できていなかった。最近では知識の構造化、製造ではサプライチェーン(バリエーション)を制することがキーワードと言われている、その類似として、自分の○○も自らがしていること、いや気がついていない自分の強み(他人からは強みとして評価されていること)を構造化したり、その階層・相関関係を明確にすること、よりいっそう、自分の未来を創るための指針としてと考えて、コンサル養成講座でまとめたつもりであった。さらに、納得できるようNCC確立を進めたいと考えた。こんな事をネットで呟き(当時はtwitterなど出現していなかった)、色々知り合いから貴重なコメントを頂いた。個々のコメントについては個人的意見として、ここでは取り上げませんが、私から返信させて頂いた内容を掻い摘んで、ご紹介したい。

Kさんへ..自分ができることを全て入れてしまおうと、コア・コンピタンスは広がり過ぎてしまうようです。その中の要素を幾つか捕らえるとコア・コンピタンスも

すつきりまとまると思いますが。自分で気がついていないコア・コンピタンスも多々あり、第3者にコメントをもらうと気付くことがあります。

Jさんへ…これだけは負けませんという強み、まさに柔らかく良い言葉ですね。パツと、切捨てできることも、コア・コンピタンスに入りますね。

Bさん、Sさんへ…他人と比べて単純に秀でた点だけを列挙しても、それはコア・コンピタンスになりづらい。難しいところですが、他人になく、他人と違う点を確立することでしょうか。言うのは易しい、でも実行は難しい。ジレンマですね。100m競争なんか、俺、後ろ向きに走ると意外と速いよ」とかですね。

Hさんへ…2004年ごろ描いた未来図は最近相当修正が必要だということを実感しています。そのような未来図も直ぐ古くなりますね。

Bさんへ…私もそう思います。人間の習性上、何となく不特定多数の方とブレインストーミングするよりも、強いリーダーがプロジェクトを引っ張る方が、無駄がなく、時にはいいかもしれませんね。

Kさんへ…私から見てもご自分の〇〇は明確ですね。それを実現するために現在進行形ですね。

Aさんへ…結局、人との繋がり、硬くいえば、人脈の大小、刺激を沢山与えるか、受けるかのバランスと思ひ

ます。

Tさんへ…そうですね、本当に沢山のいいものが古くからあって今を支えているのだと思います。意外と皆さんこの点を忘れていきますね。自分の中の〇〇で言うとはじめは自分の秀でたところと想っていても、時間が経つにつれて、他人もその域に達してきて、所謂 me too product (service)、になってしまいう点を言いたかったのです。

Iさんへ…そんなことはないと思います。20年間家族を養えた、自分では気付かない〇〇をお持ちだと思えます。それは個人の技術的能力分野に限らず、考えた方や他人を引き付けるオーラとか。

かくも多くの知り合いの方々から貴重なコメント頂き感謝し、それらに返す自分は周囲の熱意ある力で支えられ、育てられていると実感しています。とあるMOT (技術経営)の本で、強みをぐいぐいと押すのではなく、ちよつと立ち止まって、相手の弱い手抜かりの分野を探索し、そこに自分をぶつけて自分の得意とするビジネスを確立させる方が上手く行くとありました。ということは、自分の弱みも同時にしっかり認識しておかなければいけないという事だと思ひます。

漢詩研修 (六十一)

千代田岳精会 平井茂行

からまつ

北原白秋

(一) からまつ
 の林をすきて
 から松を
 しみじみと見さ

から松は
 さびしかりけり

たびゆくは
 さびしかりけり

(二) からまつ
 の林を出でて
 から松の
 林に入りぬ

からまつはの林はやに入りて

また細ほく道みちはつづけり

(三) から松まつの林はやの雨あめはさびししけどいよよししづけし

かんどこ鳥どり鳴なけるけるるのみなる

からまつはの濡ぬるるのみなる

【作者】北原 白秋（一八八五〜一九四二年（明治十八年〜昭和十七年）・日本の詩人、童謡作家、歌人。本名は北原 隆吉。詩、童謡、短歌以外にも、新民謡（「松島音頭」・「ちゃつきり節」等）の分野にも傑作を残している。生涯に数多くの詩歌を残し、今なお歌い継がれる童謡を数多く発表するなど、活躍した時代は「白露時代」と呼ばれる近代の日本を代表する詩人である。弟はそれぞれ出版人となり、北原鉄雄は写真・文学系出版社アルスを、北原義雄は美術系のアトリエ社を創業し、従弟の北原正雄も写真系の玄光社を創業した。

『仙台での恩人たち』

中屋保之

撮り溜めしておいたビデオを何本か観た。偶然、私が新婚時代を過ごした仙台を舞台とした作品が二本続いた。「八乙女」という停留所から「仙台市交通局」のバスで仙台駅近くの勤務先まで通っていた当時とは、風景も様変わりしていたのは当然だが、地名やバスの停留所などがそのままというのが何とも懐かしい。仙台市郊外の泉市（現・仙台市泉区）七北田^{ななきた}字念仏^{ねんぶつ}という住所だったと記憶している。近くを流れる「七北田川」は、奥の細道にもその地名が出てくる。また、「念仏」とは伊達藩の刑場跡を由来とする地名だとか。新婚生活には十分な2LDKの日本家屋の貸家が四軒、そのうちの二軒に私たち夫婦と、同じころに結婚した私の職場の同僚夫婦も入居した。あとで耳にしたが、新婚早々で一軒家を借りられるとは相当高い給料をもらっているに違いないとの評判だったらしい。また、当時の企業戦士は朝早くから夜遅く、時には午前様の帰宅もざらという状態のままの日曜日にしか姿を見せないため、隣の住人から「あなた、おめかけさん？」と言われたと嘆く新妻の可愛かったこと！

当時私は、外交先として石巻や岩手県^{いわて}二戸^{にのへ}などを受け持っていた。その石巻にインテリア店を営むお客様がいた。結婚することを伝えると、二戸に家具屋をやっている親戚がいるから、そこで家具を揃えろといよいよとの事で、外交ついで、というか、そのために泊りがけスケジュールを組んで出かけた。津軽塗の座卓や箆^{へら}一式は、今でも我が家で役に立ってくれている。また、長男が生まれた折には、石巻の子供用玩具店でベビーベッドやオモチャをかなり割引してくれた。中には、「お前の嫁は、私が世話をしようと思っていたのに・・・」と嘘か誠か言ってくれた造船会社の社長も恩人の一人かと感謝している。東日本大震災の数年後に石巻を訪ねた。インテリア店と玩具店は無事であったが、残念ながら造船会社はなくなっていた。

私たちの新居近くに、添田さんという先輩がいらした。特にわが妻は、奥様に大変な世話になった。勿論、私も足を向けて寝るわけにはいかないほどの恩義がある。初めて親元を離れ、見知らぬ土地へとやってきた妻の心細さを、物心両面で支えてもらった。バス以外の交通手段のない環境での買い物や、気晴らしの散歩に奥様の運転で連れていってくれたと嬉しそうに報告をする安心しきった顔が私をも安堵させたものだ。中でも、長男を出産する際、予定より早く破水した妻を病院まで運んでいただき、出産の立ち合いからその後のケアまで全てに面倒をおかけした。そんな奥様から、私も多くのことを学んだ気がする。人との付き合い方における「距離感」とでもいうのか、必要以上に相手の領域に踏み込まない、用が済むとサッと引き上げる潔さに爽快感がある。また、子供達には「本物を見せる、体験させる」を実践して、仙台で展覧会や音楽会などのイベントが催されると必ず連れて行かれていた。これは、私も大阪勤務中に幼い子供たちを連れて、京都、奈良などの文化遺産に触れさせた原点になった。今でも時折、娘と美術展に出かける。

冬になると仙台でもかなりの雪が積もることがある。そんな時は、バスは運休となる。すると、添田さんの奥様が車でご主人と一緒に私と隣の同僚を載せて会社まで送り届けてくれることも何度となくあった。

一九七三（昭和四八）年冬、私に新宿支店への異動辞令が出た。支店での送別会の後、三次会だったか四次会だったか、添田課長が一席設けてくれた。その席に我が妻が現れてびっくりした。「生まれたての息子はどうした？」と私。「添田さんの奥様が、私が見てあげることから行つてらっしゃいって！」と妻。なんと男気のある方（女性）なんだろうと、いまだに尊敬の念を持ち続けている由縁である。

齢七十数年の私には、周り中にたくさんの「恩人」がいてくれる。誠に幸せなことだと感謝に堪えない。

露台ろだいの秋あき

桜台楼主人・精真

金桂秋きんけいあきを知りて 至いたる処ところに薰かおる

露台ろだいに吸すい尽つくして 塵じん氛ふんを出いす

誰たれに語かたらん此この節せつ 好こう風ふう景けい

浜港ひんこうは西にしに望のぞんで 夕せき曛くんに映はゆ

露臺秋

平成二十四年 十月三十日

金桂知秋至處薰 露臺吸盡出塵氛
語誰此節好風景 濱港望西映夕曛

(通釈) ○金桂：金木犀。○露台：テラス。塵氛：俗気。○浜港：横浜。○夕暝：夕陽。

(通釈) 金木犀は秋の来たるを知って吾が家の庭に薫っている。テラスにその匂いをいっぱい吸うと俗気から離れる気分だ。

それにしても誰かに伝えたいものだからこの季節の素晴らしい景色を。西の方を眺めると遠く横浜の町は夕日に照り映えている。

※漢詩作りの手習いを覚え、春の桜を題材にしてから思いつき春夏秋冬、その桜を観察してみようと思いついた。それぞれの季節で桜の木としての姿に意味がある事を認識する。そしてテラスにいただけで自然の季節の味わいを得られた。

徳富蘆花に「自然と人生（我が家の富）」というのがある。愛吟の一つになっている。最後の「蝶来たり舞い 蟬来たりて鳴き、小鳥来たり遊び 秋蛩こおのせまた吟ず、静かに観ずれば宇宙の富は 殆ど三坪の庭に溢るるを覚ゆるなり」の句に同感し重なり合わせ思うことが多い。

作詩歩歩

今泉由利

尽日じんじつを幽居ゆうきよにあり望みのぞ茫茫ぼうぼう

処々しよしよに頭こうべを回めぐらせ詩興しこうは長ながし

夢裡むりこれ自成おのずからなす無限むげんの喜びよろこび

天真てんしんにして爛漫らんまん是れ吾わが郷きやう

歩歩

幽居尽日望茫茫

處處回頭詩興長

夢裡自成無限喜

天真爛漫是吾郷

○漢詩、未知、事実…一歩一歩近付いてゆきたい。

旅人芭蕉(7)

夏 目 勝 弘

大阪では八軒家近く大江に住む、伊賀出身の旧友保川一笑宅にて、歌仙を巻く。

○杜若語るも旅のひとつかな 芭蕉

(杜若が美しい季節、業平ゆかりのこの花を話題に語り合うのも、旅の一興というものだ(訳は、角川ソフィア文庫、芭蕉全句集の訳注より))
この句の三年前に、鳴海の知足亭で連句で詠んだ句に

○杜若われに発句のおもひあり 芭蕉

また同じ貞享五年に、山崎宗鑑が旧跡にて

○有がたきすがた拝まん杜若 芭蕉

一笑は(山路の花の残る笠の香)とつづけ、万菊丸がつつき(朝月夜紙干板)に明初て)

この三吟はそのときのもので、十九日に尼崎から船出し兵庫で泊。二十一日には須磨・明石を巡遊し「源氏物語 平家物語、太平記」の物語の遺跡を歩く。

○月はあれど留主のようなり須磨の夏 芭蕉

○海士の顔先見らるゝやけしの花 芭蕉

と平家一門を悲しく無常のものを受けとめた。

これより奈良京都に、そして万菊丸と別れた。杜国となり六月十五日に保美に帰り、捕縛され、流罪の地で死んだ。

芭蕉は京から大津に六月五日に近江の連衆と歌仙を巻く

○鼓子花の短夜ねぶる昼間哉 芭蕉

そして美濃に行き七月に名古屋ふたたび鳴海の知足亭、八月十二日に美濃を立ち姨捨へ。

見送る門人たちへの留別の句を

○草いろくおのく花の手柄かな 芭蕉

姥捨山へは美濃から六十余里、更科の田毎の月をみたく、越人が同行する。

○倂や姨ひとり泣月の友 この度の句。

今もなお救いの手を差し伸べていると、信じられる弘法大師に、手を合わせ、父母と心の会話をし和歌浦へと向う。
芭蕉は、父にゆえ高野山から直接奈良に向はなかつたのだろう。故に和歌の浦に行ったのか、少ない資料では調べようがない。
愛する若い門人杜国と少しでも長く、寄り添っていたい、守つてやりたいの思いからであろうか。

四月八日の釈迦の誕生日に奈良で

○灌仏の日に生れあふ鹿の子哉 芭蕉

の句の鹿の子の仏縁を詠んだ。

そして唐招提寺では鑑真和上の像を拝す。

○若葉して御めのしづくぬぐはばや 芭蕉

記行本文には、苦難の末に来朝した鑑真の像拝したことが記されている。

そして奈良で、伊賀の門人猿雖、卓袋らと語りあかし、十一日にこれらの旧友と別れを惜しんで

○鹿の角先一節の別れかな 芭蕉

鹿の角が一節めからわかるように、私たちもたんお別れすることだ。との訳

別案として(一俣にわかれ初けり鹿の角)がある。

の句を詠んでいる。

○草臥て宿かる此や藤の花 芭蕉

葛城山では

○猶みたし花に明行神の顔 芭蕉

主神の三言主の神が容貌の醜さを恥じ、夜しか活動しなかつた(謡曲の葛城)が著名。

この句は、天理。布留、葛城巡遊の句で、これより芭蕉は、大阪から須磨、明石へと西下した。

「氷魚」のことから (250) 岡本八千代

「氷魚」の稿を書こうとしたら、250回めになり、11月号に載ることになるのだった。この名だたる三河アララギ誌に20年も載せていただいていたことになるかと思う……。

「三河アララギ」の創始者、御津磯夫先生ご夫妻がご存命なら、さぞ喜んで下さっているだろうと思う。此の間も、中日新聞の「中部の文芸」の中で、「歌誌は或意味で生きものだ」と書いてあったことも思い出す……。

もともと、この「氷魚」は、島木赤彦の歌集を読んで、「氷魚」ということばを用いてかの地方の土地柄の中で、彼の家族を思う心の表現の中で用いていた言葉であって、私はかなり感動したのだった。だから「氷魚」のことからにしたのだった。赤彦の歌からも、家族を思う優しさや、子供を想う気持の表現などで、かなり感動したものであった。みな「アララギ」の心の表現を歌った短歌として、その抒情性に心をひかれたものだった。

ここに、また「御津先生のことば」を書いておく。

※「御津磯夫先生のことば」

- ・「歌はその日その日の心のはたらきが大切である。」
- ・「歌は常に私たちの眼の前にある。朝も昼も夕も心を働かせていれば歌はいくらでもそこにあるのだ。」
- ・「文章を書くにしても、その時に思った事を前文として、

本文の文章も自分の思いのままを書いてきて。あまり文献を調べたりはしない。それが自分を最もよく表現しているかもしれないからである。」と。

(私のノートより)

このあとに私の歌があったから載せておく。

夕空はさびしきものよだんだんと暗みつつくればなほもさびしよ

よよろよとよろけつつまた靴を履くおのづとかくなる己をさびしむ

屋根の上に「衣干すてふ」口ずさみ蒲団干しけりけふの春日照り

曇り空の中の十五夜おぼる月人みな同じき下影にして

(私の「いーはとぶノート」にあったからついでに載せておく)

また、このノートには子規のことが載っていたから、書いておく。

△正岡子規忌について。

※1902年(明治35年)9月19日(死亡)

又の名「ツルギ頼祭忌／糸瓜忌ともいう。

△ツルギ頼祭書屋(子規の勉強部屋のこと)

①カワウソが多く捕獲した魚を陳列するのを俗に魚を祭るのをたとえていう語

②詩文を作るときに、多くの参考書をひろげちらすこと。

今回は茂吉のことが書けなかった。……。

旅人として 2002年6月 今泉由利

天も地も別つものなしぬばたまの闇に灯ともすジャンボ機にゐる

地中海と大西洋のまじはれるミデイ運河を今朝はスケッチ

やがてやがてフランスパンになれる芽生え小麦畑のなだらか続く

今を居る人のごとくにロートレック逢ひにゆく道ライラック咲く

ローヌ川の川底粘土のバラ色レンガバラ色の家に一夜を眠り

いにしえの繁栄に今を大きく加ふコンコルドを作れる町に

つみあげしレンガは高く高くして城壁をなす攀じ登りゆく

塩田と水田とありカマルグ地方旅人として水面に映る

ひとの国のひとの大地の道の辺の赤きひなげし心にとどめ

フランスが群青色に暮るる窓群青色のなかにわが顔

なだらかな起伏のままに整地さるるプロバンスの芽吹けるものを

富士山 2003年3月

枝々に雪は等しく降りつづくただに真白し御坂の道を

冬木々の細き枝先ふくらめて雪積もりをり雪降りやまず

月見草の咲く日にあらず天下茶屋天空に雪地上にも雪

キーキーと雨戸を開くる天下茶屋過去に入りゆくほど近き過去

しつとりと雪の湿度の重々し太宰治の残せし物に

くきやかに六角形の雪の降るスケッチブックにころころと降る

塗りゆける今日の青空シャリシャリと凍りはじむる水彩画面

頂上は雲の覆へるままに描き今日の真冬の私の富士

指先は凍りつきたりとつとつと田貫湖よりの富士山の絵は

雪の上枯草の上氷の上三本足のイーゼル立つる

富士山のもっとも古き小御岳も宝永山も引きゆく線と

女なる性を生きつつ今日の日は富士山祭神木開花那姫

真実の富士の姿を十里木より深く大きく宝永火口

朝の日は大沢崩れに濃き影をほぼ真西なり信実の富士

「三河アララギ」について

- ◇三河アララギ発行所 〒一四一・〇〇二二
東京都北区王子本町一・二六・六・A
TEL 〇三・五九二四・二〇六五
ケイタイ 〇九〇・八四三四・八六四六
- ◇URL <http://imazumiyuri.jp/>
E-mail yuriiimazumi@jcom.zaq.ne.jp
- ◇編集・発行 今泉由利
- ◇三河アララギ誌は毎月発行します。
- ◇どなたも参加、投稿いただけます。
編集室までご相談ください。
- ◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、
メール、お届け下さい。
- ◇会費制は廃止。
- ◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、
創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アラ
ラギ」誕生。
- ◇令和三年現在まで一号の欠刊なく、続けてき
ました、続けてゆきます。